

金口イオアン聖体礼儀 パスハ期 (輔祭なし)

【 重聯禱 】

司祭) われらみなたましい まつと い われら おもい まつと い  
我等皆 靈 を全うして曰わん、我等の 思 を全うして曰わん、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) しゅぜんのうしや わ れつそ かみ なんぢ いの き い あわれ  
主全能者、吾が列祖の神よ、爾に禱る聆き納れて 憐めよ、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ  
神よ、爾の大なる 憐に因りて我等を 憐めよ、爾に禱る、聆き納れて 憐めよ、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またわ くに てんのうおよ くに つかさど もの ため いの  
又我が國の天皇及び國を 司る者の爲に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう およ お  
又 教會を 司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに於

ことごと われら けいてい ため いの  
ける 悉 くの我等の兄弟の爲に禱る、

しゅ あわれめ、しゅ あわれめ、しゅ あわれめ よ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またわれら けいてい しょしさい しょしゅうどうしさい およ  
又我等の兄弟、諸司祭、諸修道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆兄弟の  
ため いの  
爲に禱る、

しゅ あわれめ、しゅ あわれめ、しゅ あわれめ よ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またつね きおく ふく しせい せいきょう パトリアルフ せいどう こんりゅうしゃ およ  
又恒に記憶せらるる、福たる至聖なる正教の総主教、この聖堂の建立者、及  
び已に寝りし 悉 くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の爲に  
いの  
禱る、

しゅ あわれめ、しゅ あわれめ、しゅ あわれめ よ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またこ しそん せいどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな これ ろう これ うた およ ここ  
又此の至尊なる聖堂に物を 献 り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び此  
に立ちて爾の大にして豊なる 憐 を仰ぎ望む者の爲に禱る、

しゅ あわれめ、しゅ あわれめ、しゅ あわれめ よ。  
主 憐 主 憐 主 憐

( ※ 特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合がある。その場合も「主憐め、主憐め、主憐めよ。」と応えて歌う。 )

司祭) ( 黙誦：主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに因  
 われら あわれ なんぢ めぐみ われら およ なんぢ ゆたか あわれみ あお なんぢ  
 りて我等を憐み、爾の恵を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ爾の  
 たみ つかわ たま  
 民に遣し給え、 )

司祭) 蓋 爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今  
 いっ よよ  
 も何時も世に、



【 啓蒙者の聯禱 】

司祭) 啓蒙者よ、主に禱るべし、



司祭) 信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、



司祭) 眞實の言を以て彼等を啓蒙せん、

しゅ あわれ めよ。

司祭) <sup>ぎ ふくいんけい かれら ひら</sup> 義の福音經を彼等に啓かん、

しゅ あわれ めよ。

司祭) <sup>かれら そのせい こう した きょうかい いつ</sup> 彼等を其聖・公・使徒の教會に一にせん、

しゅ あわれ めよ。

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ かれら すく あわれ たす まも</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、彼等を救い憐み佑け護れよ、

しゅ あわれ めよ。

司祭) <sup>けいもうしゃ なんぢら こうべ しゅ かが</sup> 啓蒙者よ、爾等の首を主に屈めよ、



司祭) ( 黙誦：主我が神、高きに居り卑きを臨み、爾の獨生子・神・我が主イイススハリ

ストスを遣して人間の救となしし者よ、爾の僕・啓蒙者・其首を爾

に屈めし者を顧み、時に随いて、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦、不朽

の衣を賜い、彼等を爾が聖・公・使徒の教會に一にし、彼等を爾の選

ばれたる群に合せ給え、 )

司祭) 願くは彼等も我等と偕に、爾父と子と聖神の至尊至榮の名を讃揚せん、今も何時

も世に、



### 【 信者の聯禱1 】

司祭) 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、唯信

者復又安和にして主に禱らん、



司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

司祭) ( 黙誦: <sup>しゅ ばんぐん かみ なんぢ われら いま なんぢ せい さいだん まえ た なんぢ</sup> 主、萬軍の神や、爾が我等に、今も爾の聖なる祭壇の前に立ち、爾  
<sup>じれん ふふく われら つみ しゅうじん あやまち ため きとう ゆる たま</sup> の慈憐に俯伏し、我等の罪と衆人の過との爲に祈禱するを赦し給いしを  
<sup>なんぢ かんしゃ かみ われら いのり い われら なんぢ しゅうじん ため なんぢ</sup> 爾に感謝す、神よ、我等の禱を納れ、我等を爾が衆人の爲に、爾に  
<sup>いのり ねがい むけつ まつり けん た もの たま われらなんぢ せいしん</sup> 祈と願と無血の祭とを獻ずるに勝うる者となし給え、我等爾が聖神の  
<sup>ちから こ なんぢ ほうじ ため た もの ていざい つまづき そのりょうしん</sup> 力にて此の爾の奉事の爲に立てし者を、定罪なく、躓なく、其良心の  
<sup>いさぎよ しょう もつ いづれ ときいづれ ところ なんぢ よ かな もの なんぢ</sup> 潔き證を以て、何の時何の處にも爾を籲ぶに適う者となして、爾  
<sup>われら き なんぢ あいれん おお よ われら ため じんじ もの いた</sup> 我等に聴き、爾が哀憐の多きに依りて、我等の爲に仁慈の者となるを致せ  
、 )

司祭) <sup>けだしおよ こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup> 蓋凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



【 信者の聯禱2 】

司祭) <sup>われらまたまたあんわ しゅ いの</sup> 我等復又安和にして主に禱らん、



司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>  
 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) <sup>えいち</sup>  
 睿智、

司祭) ( 黙誦: <sup>ぜん ひと あい しゅ われらまたかつしばばなんぢ ふふく なんぢ いの われら</sup>  
 善にして人を愛する主や、我等復且数爾に俯伏し、爾に禱る、我等

<sup>いのり かえり われら たましい からだ およ にくたい れいしん けがれ いさぎよ</sup>  
 の禱を顧みて、我等の靈と體とを凡そ肉體と靈神との穢より潔

<sup>われら きず ていざい なんぢ せい さいだん まえ た たま かみ</sup>  
 くし、我等に、玷なく、定罪なく、爾の聖なる祭壇の前に立つを賜え、神

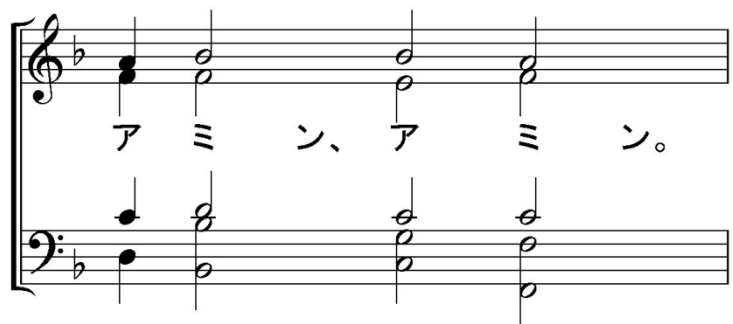
<sup>われら とも きとう もの いのち しん ぞくしん ちしき しんぼ あた たま</sup>  
 や、我等と偕に祈禱する者にも、生命と信と屬神の智識との進歩を與え給え、

<sup>かれら つね おそれ あい もつ なんぢ つと きず ていざい なんぢ せいき</sup>  
 彼等が常に畏と愛とを以て爾に務めて、玷なく、定罪なく、爾の聖機

<sup>みつ う なんぢ てんごく い た もの え たま</sup>  
 密を領け、爾の天國に入るに勝うる者となるを得せしめ給え、 )

司祭) <sup>われらつね なんぢ けんべい もと まも こうえい なんぢちち こ せいしん けん ため</sup>  
 我等常に爾が權柄の下に護られて、光榮を爾父と子と聖神に獻ずるが爲なり、

<sup>いま いつ よよ</sup>  
 今も何時も世々に、



【 ヘルヴィムの歌 】

わ れ ら つ つ し ん で ヘ ル ヴ ィ ム に の っ と  
我 等 慎 っ し ん で ヘルヴィムにのつと  
則

り ヘ ル ヴ ィ ム に の っ と り  
り ヘルヴィムにのつとり

せ い さ ん の う た を い の ち を ほ 施 ど  
聖 三 さん の 歌 を 生 の 命 を 施 だ

こ す の せ い さ ん し ゃ に た て ま つ り  
こすのせいさんしゃにたてまつり  
三 者 に 献

て

こ の よ の つ と め を し り ぞ く べ 可 し  
このよのつとめをしりぞくべ可し



司祭) ( 黙誦: 肉體の慾と快樂とに縛られし者は、一も爾光榮の王に來り、或は近づき、或は奉事するに堪うるなし、蓋爾に奉事するは、天軍の爲にも大にして畏るべきなり、然れども爾は言い難く量り難き爾の仁愛に因りて、本性を易えず失わずして人となり、我等の爲に司祭首となり、又萬有の主宰なるに縁りて、我等に此の奉事の無血祭の聖事を傳え給えり、蓋主我が神や、爾は獨天地の事を宰理す、爾はヘルヴィムの寶座に荷わるる者、セラフィムの主、イズライリの王、獨聖にして聖者の中に息う者なり、故に我爾獨善にして善く納るる者に禱る、我罪ありて堪えざる爾の僕を顧み、我が靈と心とを邪なる思慮より淨め、我神品の恩寵を被れる者を、爾が聖神の力に藉りて、此の爾の聖なる食案の前に立ち、爾が至淨なる聖體至尊なる聖血の機密を行ふに堪うる者となし給え、蓋我首を屈めて爾に就き、爾に禱る、爾の顔を我より避くる勿れ、我を爾が僕衆の中より却くる勿れ、乃我罪有りて當らざる爾の僕に此の祭物を獻ぐるを致させ給え、蓋ハリストス我が神よ、爾は獻ずる者と獻ぜらるる者、受くる者と頒たる者なり、我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す  
 爾の神とに獻ず、今も何時も世に、 )

司祭) ( 黙誦: 我等奧密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬有の王を戴かんとするに縁る、アイルイヤ、アイルイヤ、アイルイヤ。

われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた  
 我等奧密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、

いまこよ おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ばんゆう  
今此の世の 慮 を 悉く 退く可し、天使の軍の 見え ずして 荷い 奉る 萬有

おう いただ よ  
の王を 戴 かんとするに 縁る、アイルイヤ、アイルイヤ、アイルイヤ。

われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた いま  
我等 奥密にしてヘルヴィムを 像り、聖三の歌を 生命を 施す 三者に 歌い、今

こよ おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ばんゆう  
此の世の 慮 を 悉く 退く可し、天使の軍の 見え ずして 荷い 奉る 萬有の

おう いただ よ  
王を 戴 かんとするに 縁る、アイルイヤ、アイルイヤ、アイルイヤ。 )

## 【 大聖入 】

司祭) ねがわ しゆ かみ そのくに おい わ くに てんのうおよ くに つかさど もの つね きおく  
願くは主・神は其國に於て、我が國の天皇及び國を 司る者を恒に記憶せん、

いま いつ よよ  
今も何時も世に、

ねがわ しゆ かみ そのくに おい きょうかい つかさど せんき われら ぜんにほん ふしゆきょう  
願くは主・神は其國に於て、教會を 司る尊貴なる我等の全日本の府主教

セラフィムを恒に記憶せん、今も何時も世に、

ねがわ しゆ かみ そのくに おい すで ねむ ふしゆきょう ふしゆきょう ふ  
願くは主・神は其國に於て、已に寝りし府主教セルギイ、府主教イリネイ、府

主教ウラディミル、府主教フェオドシイ、府主教ダニイル、大主教ニコライ、主

教ニコライ、主教ペトル、( 及び殊に記憶せらるる 某 ) 我等の已に寝りし家族、

けいていしまい もろもろ えんしゃ ほうゆうら つね きおく いま いつ よよ  
兄弟姉妹、諸の縁者、朋友等を恒に記憶せん、今も何時も世に、

ねがわ しゆ かみ そのくに おい なんぢしゅうせいきょう ら つね きおく  
願くは主・神は其國に於て、爾衆正教のハリストティアニン等を恒に記憶せん、

いま いつ よよ  
今も何時も世に、



つ る ばんぶ 物のつかさをいただければなり  
萬物 宰 戴

ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ ア

リ ル イ ヤ

司祭) ( 黙誦: <sup>とうと</sup>尊 <sup>なんぢ</sup>きイオシフは <sup>いさぎよ</sup>爾 <sup>み</sup>の <sup>き</sup>潔 <sup>おろ</sup>き身を木より下し、<sup>きよ</sup>淨き布に<sup>ぬの</sup>裹み、<sup>つつ</sup>香料にて<sup>おお</sup>覆

<sup>あらた</sup>い、<sup>はか</sup>新なる墓に<sup>おさ</sup>藏めり、

ハリストスよ、<sup>なんぢ</sup>爾は<sup>かみ</sup>神なるにより、<sup>からだ</sup>體にて<sup>はか</sup>墓に在り、<sup>あ</sup>靈にて<sup>ぢごく</sup>地獄に在り、

<sup>うとう</sup>右盜と<sup>とも</sup>偕に<sup>てんどう</sup>天堂に在り、<sup>あ</sup>父と<sup>せいしん</sup>聖神と共に<sup>ほうざ</sup>寶座に在り、<sup>あ</sup>限なき者として<sup>かぎり</sup>一切

<sup>み</sup>を<sup>たま</sup>満て<sup>たま</sup>給えり、

ハリストスよ、<sup>わ</sup>我が<sup>ふかつ</sup>復活の<sup>いづみ</sup>泉たる<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>はか</sup>墓は、<sup>いのち</sup>生命を<sup>ほどこ</sup>施す者、<sup>もの</sup>地堂より<sup>ちどう</sup>美

<sup>もの</sup>しき者、<sup>じつ</sup>実に<sup>いか</sup>如何なる<sup>おう</sup>王の<sup>みや</sup>宮よりも<sup>かがや</sup>耀ける者と<sup>もの</sup>顯れたり、

<sup>とうと</sup>尊 <sup>なんぢ</sup>きイオシフは <sup>いさぎよ</sup>爾 <sup>み</sup>の <sup>き</sup>潔 <sup>おろ</sup>き身を木より下し、<sup>きよ</sup>淨き布に<sup>ぬの</sup>裹み、<sup>つつ</sup>香料にて<sup>おお</sup>覆

<sup>あらた</sup>い、<sup>はか</sup>新なる墓に<sup>おさ</sup>藏めり、

<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>めぐみ</sup>恵に<sup>よ</sup>因りて<sup>おん</sup>恩を<sup>た</sup>シオンに<sup>た</sup>垂れ、<sup>じょうえん</sup>イエルサリムの<sup>た</sup>城垣を<sup>たま</sup>建て給

<sup>そのとき</sup>え、<sup>なんぢぎ</sup>其時に<sup>まつり</sup>爾義の<sup>ささげもの</sup>祭、<sup>やままつり</sup>獻物と<sup>よろこ</sup>燔祭を<sup>う</sup>喜び<sup>そのとき</sup>饗けん、<sup>ひとびと</sup>其時に<sup>なんぢ</sup>人人<sup>なんぢ</sup>爾

<sup>さいだん</sup>の祭壇に<sup>こうし</sup>犢を<sup>そな</sup>奠えんとす、 )

【 増聯禱 】

われらしゅ まえ わ いのり ま くわ  
 司祭) 我等主の前に吾が禱を増し加えん、

さき とうと さいひん ため しゅ いの  
 司祭) 獻げたる尊き祭品の爲に主に禱らん、

こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ ころもつ ここ きたものため しゅ いの  
 司祭) 此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、

われらもろもろ うれい いかり あやうき まめか ため しゅ いの  
 司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、

かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
 司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐 れ め よ 。

司祭) <sup>こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい</sup> 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを<sup>しゅ もと</sup>主に求む、

しゅ た ま え よ 。  
主 賜 え よ 。

司祭) <sup>へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま</sup> 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を<sup>しゅ もと</sup>賜わんことを主に求む、

しゅ た ま え よ 。  
主 賜 え よ 。

司祭) <sup>われら つみ あやまち なた ゆる</sup> 我等の罪と過とを宥め赦さんことを<sup>しゅ もと</sup>主に求む、

しゅ た ま え よ 。  
主 賜 え よ 。

司祭) <sup>われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま</sup> 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を<sup>しゅ もと</sup>賜わんことを主に求む、

しゅ た ま え よ。  
主 賜 へ 。

司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと  
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、

しゅ た ま え よ。  
主 賜 へ 。

司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ  
我等の生命の終がハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ  
リストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、

しゅ た ま え よ。  
主 賜 へ 。

司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ  
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら  
諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等

いのち もつ かみ いたく  
の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ な んぢ に。  
主 爾 ち に 。

司祭) ( 黙誦：主・神・全能者、獨聖にして心を盡して爾を籲ぶ者より讚美の祭を  
 うもの われらざいにん いのり う なんぢ せい さいだん たづさ われら  
 受くる者よ、我等罪人の禱をも受けて爾の聖なる祭壇に携え、我等を、  
 わ つみ しゅうじん あやまち ため なんぢ ささげもの ぞくしん まつり けん た  
 我が罪と衆人の過との爲に、爾に獻物と屬神の祭とを獻ずるに勝  
 もの たま われら なんぢ まえ おんちよう え われら まつり なんぢ  
 うる者となし給え、我等に爾の前に恩寵を得せしめて、我等の祭は爾に  
 よ い もの なんぢ おんちよう ぜんしん のぞ われら うち こ そな  
 善く納れらる者となり、爾が恩寵の善神は臨みて、我等の中と此の供えら  
 れたる祭品と爾の衆人と共に居るを致させ給え、 )

司祭) なんぢ どくせいし じれん よ なんぢ かれ しせいしぜん いのち ほどこ なんぢ しん  
 爾の獨生子の慈憐に因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神と  
 とも あが ほ いま いつ よよ  
 偕に崇め讃めらる、今も何時も世に、



【 ニケア・コンスタンチヌーポリ全地公会にて採択されし信經 】

司祭) しゅうじん へいあん  
 衆人に平安、



司祭) われらたがい あいあい どうしん う みと ため  
 我等互に相愛すべし、同心にして承け認めんが爲なり、



かれざるせいさんしやを

司祭) ( 黙誦: <sup>しゅわれ ちから われなんぢ あい</sup>主我の力よ、我爾を愛せん、<sup>しゅ われ かため われ かくれが</sup>主は我の防固、我の避所なり、<sup>しゅわれ ちから</sup>主我の力  
<sup>われなんぢ あい</sup>よ、我爾を愛せん、<sup>しゅ われ かため われ かくれが</sup>主は我の防固、我の避所なり、<sup>しゅわれ ちから われなんぢ</sup>主我の力よ、我爾を  
<sup>あい</sup>愛せん、<sup>しゅ われ かため われ かくれが</sup>主は我の防固、我の避所なり、 )

司祭) <sup>もんもん つつし き</sup>門、門、敬みて聽くべし、

われしんず、ひとつのかみちちぜんのうしや、てん  
 我 信 一 神 父 全 能 者 天

とち、みゆるとみえざるばんぶつをつくりし  
 地 見 見 萬 物 造

しゅを、またしんず、ひとつのしゅイイスハリストス  
 主 又 信 一 主

かみのどくせいの子、よろづよのさきに  
 神 獨 生 子 萬 世 前

ちちよりうまれ、ひかりよりのひかり、まこ  
 父 生 光 光 眞

とのかみよりのまことのかみ、うまれし  
 神 眞 神 生

ものにてつくられしにあらざ、ちちといっ  
 者 造 非 父 一

たいにしてばんぶつかれにつくられ、われ  
 體 萬 物 彼 造 我

らひとびとのため、またわれらのすくいのため  
 等人人の爲 又 我 等 救 い の た 爲  
 めにてんよりくだり、せいしんおよびどうて  
 天 降 聖 神 及 童 貞  
 いぢよマリヤよりみをとりにととなり、われ  
 女 身 取 人 我  
 れらのためにポンテイピラトのときじゅうじかに  
 等 爲 時 十 字  
 くぎうたれ、くるしみをうけほうむら  
 釘 苦 受 葬  
 れ、だいさんじつにせいしよにかないてふく  
 第 三 日 聖 書 應 復  
 かつし、てんにのぼり、ちちのみぎにざ  
 活 天 升 父 右 坐  
 しこうえいをあらわしていけるものとしせ  
 光 榮 顯 生 者 死  
 しものとしをしんぱんするためにまたきたり、  
 者 審 判 爲 還 來 り、  
 そのくにおわりなからんを、またしんず、せい  
 其 國 終 又 信 聖  
 いしんしゅいのちをほどこすものちちよりい出  
 神 主 生 命 施 者 父 出  
 で、ちちおよびことともにおがまれほめら  
 父 及 子 共 拜 讚

れ、よげんしゃをもつてかつていいしを、また  
 預言者以嘗言又

しんず、ひとつのせいなるおおやけなるしとの  
 信一聖公使徒

きょうかいを、われみとむ、ひとつのせんれ  
 教會我認一洗禮

い、もつてつみのゆるしをうるを、われの望  
 以罪赦得我望

ぞむししゃのふくかつ、ならびにらいせい  
 死者復活並來世

のいのちを、アミン。  
 生命

【 アナフォラ 】

司祭) <sup>ただ</sup>正しく立ち、<sup>た</sup>畏れて立ち、<sup>おそ</sup>敬みて<sup>た</sup>安和にして<sup>つつし</sup>聖なる<sup>あんわ</sup>獻物を<sup>せい</sup>奉らん、<sup>ささげもの</sup>  
<sup>たてまつ</sup>

へい 和のあわれみ さ讃んよ うのまつり  
 平 和のあわれみ 讃んよ うのまつり

を

司祭) <sup>ねがわ</sup>願くは我が主<sup>わ</sup>イイススハリストスの<sup>しゆ</sup>恩、<sup>めぐみ</sup>神父の<sup>かみちち</sup>慈、<sup>いつくしみ</sup>聖神の<sup>せいしん</sup>親は、<sup>したしみ</sup>爾衆<sup>なんぢしゆう</sup>

<sup>じん</sup>人と<sup>とも</sup>偕に<sup>あ</sup>在らんことを、

なんぢのしんとも

司祭) <sup>こころうえ むか</sup> 心上に向うべし、

しゅにむかえり

司祭) <sup>しゅ かんしゃ</sup> 主に感謝すべし、

ちちとこいとせいでいしん、いつたいにしてわ分

かれざるさんしゃにふしおがむはとうぜんに

してぎなり。

司祭) ( 黙誦: <sup>なんぢ かしょう なんぢ さんよう なんぢ さんび なんぢ かんしゃ なんぢ いつさい</sup> 爾を歌頌し、爾を讃揚し、爾を讚美し、爾に感謝し、爾が一切

<sup>おき ところ おい なんぢ ふ おが とうぜん ぎ けだしなんぢ なんぢ どくせい</sup> 治むる處に於て爾に伏し拜むは當然にして義なり、蓋爾と爾の獨生

し なんぢ せいしん は い がた し がた み べ はか べ なが あ  
 子と 爾の聖神は、言い難く、知り難く、見る可からず、測る可からず、永く在  
 つね かわ なんぢ われら む ゆう おちい もの またおこ  
 り、恒に變らざる神なり、爾は我等を無より有となし、陥りし者を復起し、  
 およ われら てん のぼ なんぢ らいせい くに たま いた ばんじ おこな  
 及び我等を天に升らしめて、爾が來世の國を賜うに至るまで萬事を行  
 や これら ため およ われら し ところ し ところ あらわ ところ あらわ  
 て止めず、此等の爲に、凡そ我等が知る所、知らざる所、顯れし所、顯  
 ところ われら たま しょおん ため われらなんぢ なんぢ どくせいし なんぢ  
 れざりし所の我等に賜わりし諸恩の爲に、我等爾と爾の獨生子と爾の  
 せいしん かんしゃ またこ ほうじ ため なんぢ かんしゃ なんぢこれ われら て う  
 聖神とに感謝す、又此の奉事の爲に爾に感謝す、爾之を我等の手より領  
 あまん たま しか せんせん てんししゅおよ まんまん てんし およ  
 くるを甘じ給えり、然れども千千の天使首及び萬萬の天使、ヘルヴィム及  
 りくよく もの たもく もの たか かけ もの つばさ そな もの なんぢ  
 びセラフィム、六翼の者、多目の者、高く翔る者、翼を具うる者は爾の  
 まえ た  
 前に立ちて、 )

司祭) かちうた うた よ さけ い  
 凱歌を歌い、籲び、叫びて曰う、

せい い せい い せいなるかなしゅサヴァオフ、なんぢ  
 聖 い 聖 い 聖 なる 哉 主 ンナ

のこうえいはてんちにみつ、いとたかき  
 の 光 う え い は て ん ち に み つ 、 い と た か き

にオサンナ、しゅのなによりてきたるもの  
 に オ サ ン ナ 、 し ゅ の な に よ り て き た る も の



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい われら こ ふく ぐん とも よ い せい かな しせい</sup>人を愛する主宰よ、我等も此の福たる軍と偕に籲びて曰う、聖なる哉、至聖

<sup>かな なんぢ なんぢ どくせいし なんぢ せいしん せい かな しせい かな なんぢ</sup>なる哉、爾と爾の獨生子と爾の聖神、聖なる哉、至聖なる哉、爾の

<sup>こうえい いげん なんぢ なんぢ せかい あい なんぢ どくせいし たま いた</sup>光榮は威嚴なり、爾は爾の世界を愛して、爾の獨生子を賜うに至り、

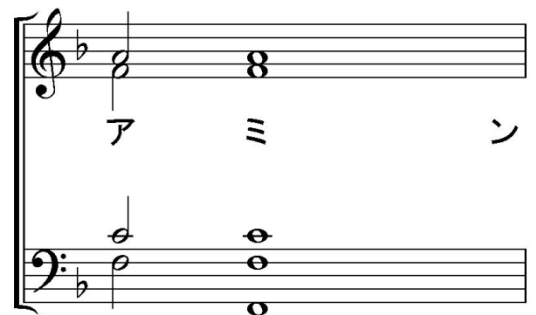
<sup>およ これ しん もの ちんりん まぬか えいせい え かけきた およ われら</sup>凡そ之を信ずる者に沈淪を免れて永生を得せしむ、彼來りて、凡そ我等

<sup>お ていせい せいぜん わた よ ただ い みづか おのれ せかい いのち</sup>に於ける定制を成全し、付されし夜、正しく言えば親ら己を世界の生命の

<sup>ため わた よ そのせい しじょうむてん て パン と かんしゃ しゅくさん</sup>爲に付しし夜、其聖にして至淨無玷なる手に餅を取り、感謝し、祝讚し、

<sup>せいせい さ そのせい もんとおよ しと あた い</sup>成聖し、撃きて其聖なる門徒及び使徒に予えて曰えり、 )

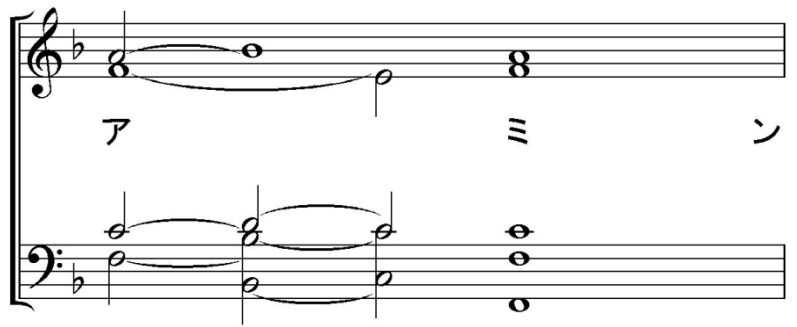
司祭) <sup>と くら これわ たい なんぢら ため さ もの つみ ゆるし え いた</sup>取りて食え、是我が體、爾等の爲に撃かるる者、罪の赦を得るを致す、



司祭) ( 黙誦: <sup>おなじ ばんさん のち しゃく と いわ</sup>同く晚餐の後に爵を執りて曰く、 )

司祭) <sup>みなこれ の これわれ しんやく ち なんぢら およ おお ひと ため なが もの つみ ゆるし</sup>皆之を飲め、是我の新約の血、爾等及び衆くの人爲に流さるる者、罪の赦を

<sup>え いた</sup>得るを致す、



司祭) ( 黙誦：故に我等此の救を施す誠、及び凡そ我等の爲に有りし事、即十  
 じか はか だいさんじつ ふくかつ てん のぼ こと みぎ ぎ こと こうえい さいど こうりん  
 字架、墓、第三日の復活、天に升る事、右に坐する事、光榮なる再度の降臨  
 きおく  
 を記憶して、 )

司祭) なんぢ たまもの なんぢ しょぼく しゅう ためいつさい ため なんぢ たてまつ  
 爾の賜を、爾の諸僕より、衆の爲一切の爲に爾に獻りて、



司祭) ( 黙誦：我等復爾に此の靈智なる無血の奉事を獻じて、願ひ祈り切に求む、爾の  
 われらまたなんぢ これいち むけつ ほうじ けん ねが いの せつ もと なんぢ  
 我等復爾に此の靈智なる無血の奉事を獻じて、願ひ祈り切に求む、爾の

せいしん われらおよ こ そな さいひん つかわ たま  
聖神を我等及び此の奠えたる祭品に遣し給え、)

司祭) ( 黙誦：第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取  
あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた かみ いさぎよ  
り上ぐる事勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、神よ、潔

こころ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま  
き心を我に造り、正しき靈を我の衷に改め給え、

だいさんじ なんぢ せいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と  
第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取  
あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた われ なんぢ  
り上ぐる事勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、我を爾の

かんばせ お なか なんぢ せいしん われ と あ なか  
顔より逐う事勿れ、爾の聖神を我より取り上ぐる事勿れ、

だいさんじ なんぢ せいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と  
第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取  
あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた  
り上ぐる事勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、)

司祭) こ へい もつ なんぢ そんたい な  
此の餅を將て、爾のハリストスの尊體と成し、アミン。

こ しゃくちゆう もの もつ なんぢ そんけつ な  
此の爵中の者を將て、爾のハリストスの尊血と成し、アミン。

なんぢ せいしん もつ これ へんか  
爾の聖神を以て之を變化せよ、アミン。アミン。アミン。

( 黙誦：願くは此は領くる者の爲に、靈の警醒となり、諸罪の赦となり、爾

せいしん たいごう てんごく え なんぢ お ゆうかん しんあん  
が聖神の體合となり、天國を得ることとなり、爾に於ける勇敢となり、審案

あるい ていざい  
或は定罪とならざらんことを、

また れいち ほうじ しん もつ ねむ げんそ れつそ たいそ よげんしゃ しと  
又この靈智なる奉事を、信を以て寝りし元祖・列祖・太祖・預言者・使徒・

でんどうしゃ ふくいんしゃ ちめいしゃ ひょうしんしゃ せつせいしゃ およ およ しん もつ おわ  
傳道者・福音者・致命者・表信者・節制者、及び凡そ信を以て終り

ぎ たましい ため なんぢ けん  
し義なる靈の爲に爾に獻ず、)

司祭) こと せいししけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ  
特に至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マ

ため  
リヤの爲、

【 神の使恩寵を満ち被る者に 】 ※祭日に他の「生神女の歌」を歌う例あり  
ザダストイニク

かみのつかい い慈 つくしみをみちこ蒙うむるもの  
神使 慈 満 蒙 者

に よんでいわ く、い さぎよ きしよぢよや よろこ  
呼 日 潔 處 女 慶 子

べよ、またい う、よろこべよ、な んぢの  
又 日 慶 爾 子

こみっかめ に ふくか つし、し せし も者 のを おこ  
子 三 日 目 に 復 活 し 死 せし も者 のを おこ

せり、ひとびとや、た のし めよ。  
人 人 樂 のし めよ。

あらたなる レル ヲムや、ひかり ひかれよ、かみ  
新 光 光 神

の 光 う え い なん ぢ に か が や け ば な り 、  
光 榮 爾 輝

シ オ ン や 、 た の し み い わ え 、 なん ぢ い さ  
樂 祝 爾 潔

ぎ よ き か み の は は や 、 なん ぢ の う み し し ゅ の  
神 母 爾 生 主

ふ く か つ を よ ろ こ び た ま え 。  
復 活 を 喜 び 給 え

司祭) ( 黙誦：聖預言者・前駆・授洗イオアン、光榮にして讚美たる聖使徒、及び爾が

諸聖人の爲に獻ず、神よ、彼等の祈禱に因りて我等を顧み、並に凡そ

永生の復活の望を懐きて寝りし者を記憶して、彼等を爾が顔の光

の照す所に安息せしめ給え、

又爾に禱る、主よ、爾が眞實の言を正しく傳うる正教者の凡の

主教品、凡の司祭品、ハリストスに因る輔祭品、及び悉くの神品を記

憶せよ、

また此の靈智なる奉事を、全世界の爲、聖・公・使徒の教會の爲、潔淨

とうと いのち わた もの ため わ くに てんのうおよ くに つかさど もの ため  
 にして 尊く 生を度る者の爲、我が國の天皇及び國を 司る者の爲に  
 なんぢ けん しゅ かれら たいへい こくせい たま われら かれら へいわ およそ  
 爾に獻ず、主よ、彼等に泰平の國政を賜え、我等も彼等の平和により、凡  
 けいけん けつじょう もつ てんせいあんぜん いのち わた ため  
 の敬虔と潔淨とを以て、恬静安然にして生を度らんが爲なり、 )

司祭) <sup>しゅ</sup>主よ、<sup>こと</sup>殊に<sup>きょうかい</sup>教會を<sup>つかさど</sup>司る<sup>そんき</sup>尊貴なる<sup>われら</sup>我等の<sup>ぜんにほん</sup>全日本の<sup>ふしゅきょう</sup>府主教<sup>きおく</sup>セラフィムを記憶し、  
<sup>かれ</sup>彼を<sup>へいあん</sup>平安・<sup>ぶなん</sup>無難・<sup>そんき</sup>尊貴・<sup>そうけん</sup>壯健・<sup>ちようじゅ</sup>長壽なる者、<sup>もの</sup>及び<sup>およ</sup>爾が<sup>しんじつ</sup>眞實の<sup>ことば</sup>言を<sup>ただ</sup>正しく<sup>つた</sup>傳う  
<sup>もの</sup>る者として、<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>せい</sup>聖なる<sup>きょうかい</sup>教會に<sup>あた</sup>與え<sup>たま</sup>給え、



司祭) ( 黙誦：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>われら</sup>我等が<sup>お</sup>居る<sup>ところ</sup>所の<sup>こ</sup>此の<sup>まち</sup>都邑と<sup>およそ</sup>凡の<sup>まち</sup>都邑と<sup>ちほう</sup>地方、<sup>およ</sup>及び<sup>しん</sup>信を<sup>もつ</sup>以て<sup>こ</sup>此の<sup>うち</sup>中に  
<sup>お</sup>居る<sup>もの</sup>者を<sup>きおく</sup>記憶せよ、<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>こうかい</sup>航海する<sup>もの</sup>者、<sup>りょこう</sup>旅行する<sup>もの</sup>者、<sup>やまい</sup>病を<sup>うれ</sup>患う<sup>もの</sup>者、<sup>かんなん</sup>艱難  
<sup>あ</sup>に<sup>もの</sup>遭う<sup>とりこ</sup>者、<sup>もの</sup>擄となり<sup>およ</sup>し<sup>かれら</sup>者、<sup>すくい</sup>及び<sup>きおく</sup>彼等の<sup>しゅ</sup>救を<sup>なんぢ</sup>記憶せよ、<sup>しよせいどう</sup>主よ、<sup>しよせいどう</sup>爾の<sup>しよせいどう</sup>諸聖堂  
<sup>もの</sup>に<sup>たてまつ</sup>物を<sup>ぜんぎょう</sup>獻り、<sup>おこな</sup>善業を<sup>もの</sup>行<sup>およ</sup>う<sup>ひんしゃ</sup>者、<sup>きねん</sup>及び<sup>もの</sup>貧者を<sup>きおく</sup>記念する<sup>およ</sup>者を<sup>およ</sup>記憶し、<sup>およ</sup>及び  
<sup>われら</sup>我等<sup>しゅうじん</sup>衆人に<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>あわれみ</sup>憐を<sup>た</sup>垂<sup>たま</sup>れ給え、 )

司祭) <sup>ならび</sup>並に<sup>われら</sup>我等に、<sup>くち</sup>口を<sup>いつ</sup>一にし<sup>こころ</sup>心を一にして、<sup>なんぢちち</sup>爾<sup>こ</sup>父と<sup>せいしん</sup>子と<sup>しそんしげん</sup>聖神の<sup>な</sup>至尊<sup>さんえい</sup>至嚴の名を<sup>さんえい</sup>讚榮  
<sup>さんしょう</sup>讚頌<sup>たま</sup>するを<sup>いま</sup>賜え、<sup>いつ</sup>今も<sup>よよ</sup>何時も<sup>よよ</sup>世世に、



司祭) <sup>ねがわ</sup>願<sup>おおい</sup>くは<sup>かみ</sup>大なる<sup>わ</sup>神、<sup>きゅうしゅ</sup>我が<sup>あわれみ</sup>救主<sup>なんぢしゅうじん</sup>イイスス<sup>とも</sup>ハリストスの<sup>あ</sup>憐は、<sup>あ</sup>爾<sup>あ</sup>衆人<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>偕に<sup>あ</sup>在ら

んことを、

なんぢのしんとも。  
爾 神

【 増聯禱 】

司祭) われらしよせいじん きおく またまたあんわ しゅ いの  
我等諸聖人を記憶して、復又安和にして主に禱らん、

しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) すで けん およ せい とうと さいひん ため しゅ いの  
已に獻ぜられ及び聖にせられし尊き祭品の爲に主に禱らん、

しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) ひと あい わ かみ これ そのせい てんじょう むけい さいだん お ぞくしん けいこう  
人を愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香とし

て享け、我等に報いて、神妙の恩寵と聖神の賜とを降すが爲に禱らん、

しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの  
我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと</sup>  
此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、

しゅ た ま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと</sup>  
平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む

しゅ た ま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと</sup>  
我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、

しゅ た ま え よ。  
主 賜 ま え よ。

司祭) われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと  
我等の 霊 に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、

しゅ た ま え よ。  
主 賜 ま え よ。

司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと  
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、

しゅ た ま え よ。  
主 賜 ま え よ。

司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ  
我等の生命の終がハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ  
リストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、

しゅ た ま え よ。  
主 賜 ま え よ。

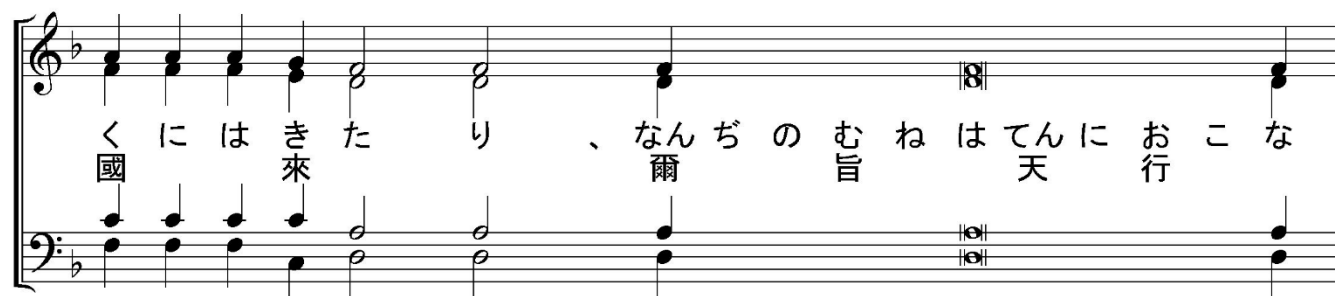
司祭) しん どういつ せいしん たいごう もと われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび  
信の同一と聖神の體合とを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、并  
ことごと われら いのち もつ かみ いたく  
に 悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい われら わ ことごと いのち のぞみ なんぢ ゆだ ねが</sup>人を愛する主宰よ、我等は我が 悉 くの生命と 望 とを爾 に委ねて、願ひ  
<sup>いの せつ もと われら きよ りょうしん もつ なんぢ てんじょう おそ きみつ</sup>祈り切に求む、我等に、淨き良 心を以て、爾 が天 上の畏るべき機密、  
<sup>こ せい ぞくしん えん あづか たま こ つみ ゆるし あやまち надめ</sup>此の聖せられたる屬神の筵に 與 るを賜いて、此れが罪の 赦、 過 の宥、  
<sup>せいしん たいごう てんごく しぎょう なんぢ お ゆうかん しんあんあるい ていざい</sup>聖神の體合、天國の嗣業、爾 に於ける勇敢となりて、審案 或 は定罪  
<sup>い た たま</sup>とならざるを致させ給え、 )

【 天主經 】

司祭) <sup>しゅさい われら いさみ もつ つみ え あえ なんぢてん かみちち よ い たま</sup>主宰よ、我等に 勇 を以て、罪を獲ずして、敢て爾 天の神父を籲びて言うを賜え、



わ る る が ご と く ち に も お 行 こ な わ れ ん、 わ  
 如 地 ち 行 今 我 等 與 た 給

が に ち よ う の か て を こ ん に ち わ れ ら に あ た え た 給  
 日 用 の 糧 を 今日 我 等 與 た 給

ま え、 わ れ ら に お 債 い め あ る も の を わ  
 我 等 お 債 い め あ る も の を わ

れ ら ゆ る す が ご と く、 わ れ ら の お 債 い  
 赦 如 く、 我 等 の お 債 い

め を ゆ る し た ま え、 わ れ ら を い ざ な い  
 赦 給 ま え、 我 等 を 誘 ない

に み ち び か ず、 な お わ れ ら を き よ う あ  
 導 ず、 猶 我 等 を 凶 あ

く よ り す く い た ま え  
救 給

司祭) <sup>けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup>  
蓋 國と權 能と光 榮は 爾 父と子と聖 神に歸す、今も何時も世に、

ア ミ ン。

司祭) <sup>しゅうじん へいあん</sup>  
衆 人に平安、

なんぢ の し ん に も 。  
爾 の 神

司祭) <sup>なんぢら こうべ しゅ かが</sup>  
爾 等の 首 を主に 屈めよ、

しゅ な んぢ に 。  
主 爾 ち に

司祭) ( 黙誦: <sup>み べ おう そのほか がた のうりよく もつ ばんゆう かくてい そのじれん おお</sup>  
見る可からざる王、其量り難き能力を以て萬有を畫定し、其慈憐の多

<sup>もつ ばんぶつ む ゆう しゅ われらなんぢ かんしゃ しゅさい なんぢみづか</sup>  
きを以て萬物を無より有となしし主よ、我等爾に感謝す、主宰よ、爾親

<sup>なんぢ こうべ かが もの てん かえり たま けだしけつにく かが あら</sup>  
ら爾に首を屈めし者を天より顧み給え、蓋血肉に屈めしに非ず、

すなわちなんぢおそ かみ かが ゆえ しゅさい なんぢ ここ そな もの われ  
 乃 爾 畏るべき神に屈めり、故に主宰よ、 爾は此に奠えたる者を、我  
 らしゅうじん ぜん ため かくじん ひつよう おう ひとし わか こうかい もの とも  
 等 衆 人の善の爲に、各人の必要に應じて 等く頌ち、航海する者と偕に  
 こうかい りょこう もの とも りょこう れいたい いし やまい うれ もの  
 航海し、旅行する者と偕に旅行し、靈體の醫師として、病を患うる者を  
 いや たま  
 醫し給え、 )

司祭) なんぢ どくせいし おんちょう じれん じんあい よ なんぢ かれ しせいしぜん いのち  
 爾が獨生子の恩寵と慈憐と仁愛とに因りてなり、 爾は彼と至聖至善にして生命  
 ほどこ なんぢ しん とも さんよう いま いつ よよ  
 を施す 爾の神と偕に讃揚せらる、 今も何時も世に



司祭) ( 黙誦： しゅ われら かみ なんぢ せい すまい なんぢ くに こうえい ほう  
 主 イイススハリストス我等の神よ、 爾の聖なる住所と 爾が國の光榮の寶  
 ざ かえり たま うえ ちち とも ざ ここ み われら とも おもの  
 座より 眷み給え、上には父と偕に坐し、此には見えずして我等と偕に居る者よ、  
 きた われら せい なんぢ けんとう て もつ なんぢ しじょう たい しそん ち  
 來りて我等を聖にし、 爾の權能の手を以て、 爾が至淨の體と至尊の血とを  
 われら さづ またわれら もつ しゅうじん さづ たま  
 我等に授け、 又我等を以て 衆人に授け給え、 )

司祭) つつし き せい もの せい ひと  
 謹みて聽くべし、 聖なる物は聖なる人に、





イ イ ス ハリ ス ト ナ リ 、 ア ミ ン。

司祭) ( 黙誦：神の <sup>かみ</sup> 羔 <sup>こひつじ</sup> は <sup>さ</sup> 割 <sup>わか</sup> かれ 分 <sup>かれ</sup> たる、彼 <sup>さ</sup> は <sup>ぶんり</sup> 割 <sup>つね</sup> かれて 分 <sup>くら</sup> 離 <sup>なが</sup> せず、恒 <sup>つ</sup> に <sup>つき</sup> 食 <sup>ず</sup> われて 永 <sup>ず</sup> く 盡 <sup>ず</sup> きず、  
<sup>すなわち</sup> 乃 <sup>もの</sup> 領 <sup>せい</sup> くる 者 <sup>を</sup> を 聖 <sup>に</sup> にす、 )

**※信徒領聖まで、<sup>レーゲント</sup>聖歌指揮者の指示に随って歌うこと。**

( 奉事規程が指定しているのは『主日領聖詞』、すなわち第148聖詠の第一節を繰り返し歌い、間に2節以下を句としてアンティフォン形式で歌う。若しくは誦經する。

本来は神品領聖と信徒領聖に区別はないので、同じ領聖詞を使う。日本正教会では通年「大パスハ領聖詞」を歌うことが多い。

日本正教会では神品領聖時に『主日領聖詞』に代えて、早課イルモス（其の週の調、又は生神女のカタワシヤ等）、スティヒラ等を歌うことが多いが、これに奉事規程上の根拠はない。

歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても良い。 )

司祭) <sup>かみ</sup> 神 <sup>おそ</sup> を 畏 <sup>こころ</sup> る 心 <sup>しん</sup> と 信 <sup>もつ</sup> と を 以 <sup>ちか</sup> て 近 <sup>きた</sup> づき 來 <sup>れ</sup> れ、



しゅ の な に よ り て き た る も の は あ が め ほ め ら  
 主 名 因 り て 來 る 者 の は 崇 が め ほ め ら



る しゅ は か み な り わ れ ら を て ら せ り  
 主 神 我 等 を 照 ら せ り

全員) <sup>しゅ</sup> 主 <sup>われしん</sup> よ 我 <sup>か</sup> 信 <sup>みと</sup> じ、且 <sup>なんぢ</sup> つ 承 <sup>じつ</sup> け 認 <sup>せい</sup> め て、爾 <sup>かみ</sup> を 實 <sup>こ</sup> に ハ <sup>ざい</sup> リ ス ト ス 生 <sup>にん</sup> 活 <sup>すく</sup> の 神 <sup>ため</sup> の 子、罪 <sup>ずく</sup> 人 <sup>ため</sup> を 救 <sup>ため</sup> う が 爲

<sup>よ</sup> に 世 <sup>きた</sup> に 來 <sup>もの</sup> り し 者 <sup>しゅうざい</sup> と な す、衆 <sup>う</sup> 罪 <sup>うち</sup> 人 <sup>われ</sup> の 中 <sup>だいいち</sup> 我 <sup>またしん</sup> 第 <sup>こ</sup> 一 <sup>すなわち</sup> な り、又 <sup>なんぢ</sup> 信 <sup>しじょう</sup> ず、此 <sup>しじょう</sup> れ は 乃 <sup>しじょう</sup> 爾 <sup>しじょう</sup> が 至 <sup>しじょう</sup> 淨

<sup>たい</sup> の 體 <sup>こ</sup>、此 <sup>すなわち</sup> れ は 乃 <sup>しそん</sup> 爾 <sup>ち</sup> が 至 <sup>ゆえ</sup> 尊 <sup>なんぢ</sup> の 血 <sup>いの</sup> な り と、故 <sup>われ</sup> に 爾 <sup>あわれ</sup> に 祈 <sup>わ</sup> る、我 <sup>わ</sup> を 憐 <sup>じゆう</sup> み、我 <sup>じゆう</sup> が 自 <sup>じゆう</sup> 由 <sup>じゆう</sup> と 自 <sup>じゆう</sup> 由

<sup>ことば</sup> な ら ず し て、言 <sup>おこ</sup> と 行 <sup>ない</sup> に て、知 <sup>し</sup> る と 知 <sup>し</sup> ら ず し て、犯 <sup>おか</sup> し し 諸 <sup>しよざい</sup> 罪 <sup>ゆる</sup> を 赦 <sup>たま</sup> し 給 <sup>なら</sup> え、並 <sup>われ</sup> に 我 <sup>われ</sup> に

ていざい なんぢ しじょう きみつ う つみ ゆるし えいせい え いた たま  
 定罪なく、爾が至淨なる機密を領けて、罪の赦しと永生とを得るを致させ給え、ア  
 ミン。

かみ こ いまわれ なんぢ きみつ えん あづか もの い たま けだしわれなんぢ あだ きみつ  
 神の子よ、今我を爾が機密の筵に與る者として容れ給え、蓋我爾の仇に機密  
 つ を告げざらん、また なんぢ ごと せつぷん な すなわちうとう ごと なんぢ う みと  
 を告げざらん、また 爾にイウダの如き接吻を爲さざらん、乃右盜の如く 爾を承け認  
 めて曰う、主よ、なんぢ くに おい われ きおく しゅ いの なんぢ せい きみつ う  
 主よ、爾の國に於て我を記憶せよと、主よ、祈る 爾の聖なる機密を領く  
 るは、わ ため しんあんあるい ていざい れいたい いやし  
 我が爲に審案或は定罪とならず、すなわち靈體の醫とならんことを、

【 (大パスハ) 領聖詞 】

※ 全員が領聖し畢り、元の位置に戻るまで繰り返す。

ハリス トスの せい たい い を う け 、 ふ し の い づ み  
 聖 體 領 不 死 泉 み

を の め よ 。  
 飲

司祭) ( 黙誦：ハリストスの復活を見て、聖なる主イイスス・獨罪なき者を拜むべし、ハリ

ストスよ、我等 爾の十字架を拜み、爾の聖なる復活を歌い讃む、爾は我

らの神なればなり、爾の外他の神を知らず、唯 爾の名を稱う、信者よ、皆

來りてハリストスの聖なる復活を拜むべし、十字架にて 喜は全世界に臨

めばなり、我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇め歌わん、主は十字架に釘

うたるるを忍びて、死を以て死を 亡ししによる、

あらた ひか ひか しゅ こうえいなんぢ かがや  
 新なるイエルサリムよ、光り光れよ、主の光榮 爾に輝けばなり、シオン

よ、今祝いて 樂めよ、なんぢ いさぎよ しょうしんぢよ なんぢ う しゅ ふくかつ  
 爾も 潔き生神女よ、爾が生みし主の復活を

よろこ たま  
 喜び給え、

ああおおい しせい ああちえ かみ ことば ちから  
 嗚呼 大にして至聖なるパスハ・ハリストスよ、嗚呼智慧と神の言と能力よ、

なんぢ くに く ひ おい われら なおしたし なんぢ う たま  
 爾が國の暮れざる日に於て、我等に猶親く爾を領けさせ給え

しゅ なんぢ しそん ち もつ なんぢ しよせいじん きとう よ ここ きおく  
 主よ、爾が至尊の血を以て、爾が諸聖人の祈禱に因りて、此に記憶せ

もの しよざい あら たま  
 られし者の諸罪を滌い給え、

ひと あい しゅさい わ たましい おんしゅ われら こ ひ おい なんぢ てん  
 人を愛する主宰、我が靈の恩主よ、我等に、此の日に於ても、爾が天

じょう ふし きみつ う たま なんぢ かんしゃ われら みち なお われら  
 上の不死の機密を領けさせ給いしを爾に感謝す、我等の途を直くし、我等

しゅうじん なんぢ おそ おそ けんご われら いのち まも われら あゆみ かた  
 衆人を爾を畏るるの畏れに堅固にし、我等の生命を護り、我等の歩を固

たま こうえい しょうしんぢょ えいていどうぢょ およ なんぢ しよせいじん いのり  
 め給え、光榮なる生神女・永貞童女マリヤ及び爾が諸聖人の祈と

ねがい よ  
 願とに因りてなり、 )

※ 全員が元の位置に戻って歌う準備ができてから「アリルイヤ」を歌う。



司祭) かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ  
 神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降せ、



い の ち を た ま え り 。  
生 の 命 を 賜 ま え り 。

司祭) ( 黙誦：神よ、願 <sup>かみ</sup>くは <sup>ねがわ</sup>爾 <sup>なんぢ</sup>は <sup>しよてん</sup>諸 <sup>うえ</sup>天 <sup>あ</sup>の上 <sup>なんぢ</sup>に <sup>こうえい</sup>舉 <sup>ぜんち</sup>げ <sup>おお</sup>られ、 <sup>われ</sup>爾 <sup>われ</sup>の <sup>われ</sup>光 <sup>われ</sup>榮 <sup>われ</sup>は <sup>われ</sup>全 <sup>われ</sup>地 <sup>われ</sup>を <sup>われ</sup>蔽 <sup>われ</sup>わ <sup>われ</sup>ん、 <sup>われ</sup>我 <sup>われ</sup>等 <sup>われ</sup>の <sup>われ</sup>神 <sup>われ</sup>は <sup>われ</sup>恒 <sup>われ</sup>に <sup>われ</sup>崇 <sup>われ</sup>め <sup>われ</sup>讃 <sup>われ</sup>め <sup>われ</sup>ら <sup>われ</sup>る、 )

司祭) <sup>いま</sup>今 <sup>いつ</sup>も <sup>よよ</sup>何 <sup>よよ</sup>時 <sup>よよ</sup>も <sup>よよ</sup>世 <sup>よよ</sup>に <sup>よよ</sup>、

ア ミ ン。

しゅよ、ねがわくはわがくちはさんびにみてら  
主 願 が わ く は わ が く ち は さ ん び に み て ら

れ て、われらなんぢのこ光うえいをうたわん、  
我 等 爾 の 光 う え い を う た わ ん、

なんぢわれらに、しんせいにしてふしなるい生  
爾 我 等 に 、 し ん せ い に し て ふ し な る い 生

のちをほどこす なんぢのせい きみつを  
命 施 爾 聖 機 密

うくるをゆるせばなり、いのるわれらを  
領 許 祈 我 等

なんぢのせい せい にまもり、しゅうじつなんぢ  
爾 成 聖 護 終 日 爾

のぎをならわしめたまえ、  
義 習 給

ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ

司祭) つつし た しんせい しじょう ふし いのち ほどこ てんじょう おそ せい  
 謹みて立て、神聖・至浄・不死にして生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖  
 きみつ う よろ しゅ かんしゃ  
 機密を領けて、宜しく主に感謝すべし、

しゅ あ わ れ め よ しゅ あ わ れ め よ  
主 憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>  
神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救い憐み護れよ、

司祭) <sup>こ ひ じゆんぜん せいせい へいあん むざい もと われらおのれ みおよ たがい おのおの</sup>  
此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に各

<sup>み もつ ならび ことごと われら いのち もつ かみ いたく</sup>  
の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ な んぢ に  
主

司祭) <sup>けだしなんぢ われら せいせい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ</sup>  
蓋爾は我等の成聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世

に、

ア ミ ン ア ミ ン

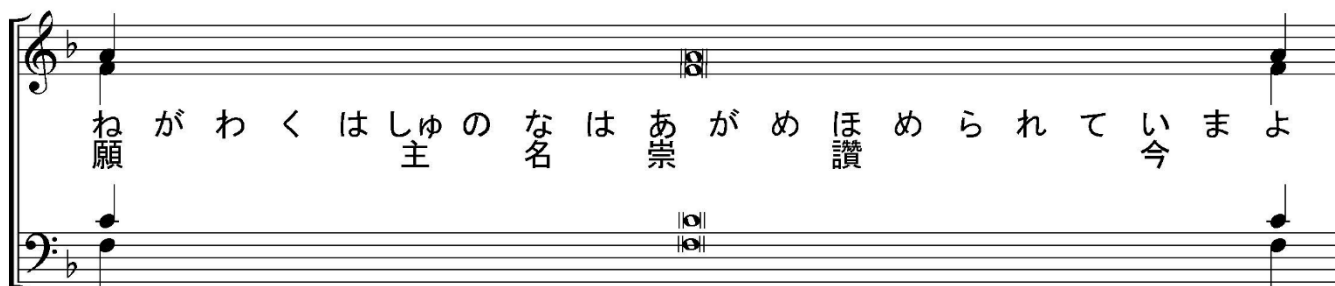
司祭) <sup>へいあん い</sup>  
平安にして出づべし、

しゅ の な に よ り て  
主 名 因

司祭) <sup>しゅ いの</sup>  
主に禱らん、



(司祭) なんぢ さんよう もの ふく くだ およ なんぢ たの もの せい しゅ なんぢ たみ すく  
 爾を讃揚する者に福を降し、及び爾を恃む者を聖にする主よ、爾の民を救い、  
 およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい じゅうまん まも なんぢ どう び あい  
 及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の充満を守り、爾が堂の美なるを愛す  
 もの せい なんぢ しんせい ちから もつ かれら こうえい およ われらなんぢ たの もの のこ  
 る者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、及び我等爾を恃む者を遣  
 なか なんぢ せかい なんぢ しょきょうかい しょしさい わく に てんのうおよ くに つかさど もの  
 す勿れ、爾の世界と爾の諸教會と諸司祭と、我が國の天皇及び國を司る者  
 およ なんぢ しゅうじん へいあん たま けだしおよそ ぜん ほどこし およそ ぜんび たまもの うえ  
 及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる賜は、上  
 より、なんぢこうめい ちち くだ われらこうえい かんしゃ ふくはい なんぢちち こ せいしん けん  
 爾光明の父より降るなり、我等光榮・感謝・伏拜を爾父と子と聖神に獻  
 ず、いま いつ よよ  
 今も何時も世に、



がめほめられていまよりよよ世にいたらん  
讃 今 世 世 至

ねがわくはしゅのなはあがめほめられていまよ  
願 主 名 崇 讃 今

りよよ世にいたらん  
世 世 至

**誦經)** われいづ とき しゅ ほ あ かれ ほ つね わ くち あ わ たましい しゅ もつ  
 我 何れの時にも主を讃め揚げん、彼を讃むるは恒に我が口に在り、我が 靈 は主を以  
 ほこ おんじゅう もの き たの われ とも しゅ とうと とも かれ な あが ほ  
 て誇らん、温 柔 なる者は聞きて樂しまん。我と偕に主を 尊 め、偕に彼の名を崇め讃  
 われかつ しゅ たづ かれ われ き い わ すべ あやう われ まぬか  
 めん。我 嘗て主を尋ねしに、彼は我に聆き納れて、我が都ての 危 きより我を 免 れしめ  
 たま め あ かれ あお もの てら かれら おもて はぢ う こ まづ  
 給えり。目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の 面 は愧を受けざらん。此の貧しき  
 ものよ しゅ き い これ そのことごと かんなん すく しゅ つかい しゅ おそ  
 者呼びしに、主は聆き納れて、之を其 悉 くの艱難より救えり。主の 使 は主を畏る  
 もの めぐ まも かれら たす あぢわ しゅ いか じんじ み かれ たの ひと  
 る者を環り衛りて、彼等を援く。味 えよ、主の如何に仁慈なるを見ん、彼を恃む人は  
 さいわい およ しゅ せいじん しゅ おそ けだしかれ おそ もの とぼ わか  
 福 なり。凡そ主の聖人よ、主を畏れよ、蓋 彼を畏るる者は乏しきことなし。少き  
 しし とぼ う ただしゅ たづ もの なん こうふく か  
 獅子は乏しくして餓え、唯 主を尋ぬる者は何の幸福にも缺くるなし。

**司祭)** ( 黙誦： みづか ほうりつ しょよげんしゃ じょうまん ちち ていせい ことごと じょうまん  
 親ら法律と諸預言者との成満にして、父の定制を 悉 く成満せし  
 わ かみ つね われら こころ よろこび たのしみ じょうまん たま  
 ハリストス我が神よ、常に我等の心を喜 と 樂 とに成満せしめ給え、  
 いま いつ よよ  
 今も何時も世世に、 )

**司祭)** ねがわ しゅ こうふく そのおんちよう じんあい よ つね なんぢら あ いま いつ よよ  
 願くは主の降福は、其恩 寵 と仁愛とに因りて常に 爾 等に在らん、今も何時も世世

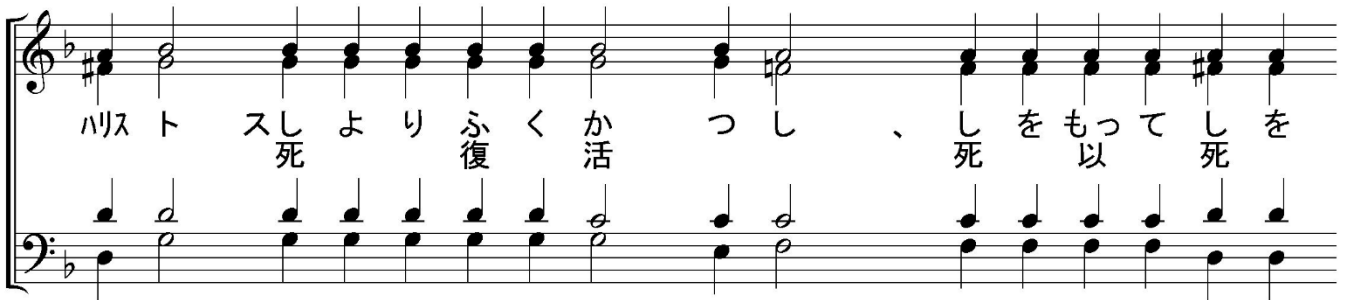
に、



※ もし永眠者記憶を続けて行う場合はP47【 <sup>リテイヤ</sup>永眠者の爲の熱衷祈祷】に飛ぶ。

【 通常の終結 】

司祭) ハリストス<sup>かみわれら</sup>神<sup>たのみ</sup>我等の<sup>こうえい</sup>侍<sup>なんぢ</sup>よ、<sup>き</sup>光榮は爾に歸す、<sup>こうえい</sup>光榮は爾に歸す、<sup>き</sup>



ほろぼし、はかにあるものに

いのちをたまえり。

ハリストスより復活し、死をもって死を

ほろぼし、はかにあるものに

いのちをたまえり。

司祭) <sup>し ふくかつ し もつ し ほろぼ はか あ もの いのち たま われら まこと</sup>  
死より復活し、死を以て死を滅し、墓に在る者に生命を賜いしハリストス我等の眞

<sup>かみ そのしじょう はは こうえい さんび せいしと われら せいしんぷ</sup>  
の神は、其至淨なる母、光榮にして讚美たる聖使徒、我等の聖神父コンスタンチノー

<sup>だいしゅきょうせい きんこう こくしょうほうしん わがしよしんぷ にほん あしと</sup>  
ポリスの大主教聖金ロイオアン、克肖捧神なる我諸神父、(某)日本の亞使徒

<sup>だいしゅきょうせい せい ぎ かみ そふぼ およ およ しょせいじん</sup>  
大主教聖ニコライ、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、及び諸聖人の

<sup>きとう より われら あわれ すく かれ ぜん ひと あい しゅ</sup>  
祈禱に因て我等を憐み救わん、彼は善にして人を愛する主なればなり、

ア ミ ン。

ばんじゅし  
【 萬壽詞 】

か み よ わ が く に の て ん の う お よ び  
神 我 國 天 皇 及 び

く に を つ か さ ど る も の  
國

わ れ ら の ふ し ゆ き よ う セ ラ フィ ム、 お よ び こ と ご と  
我 等 府 主 教 及 び 悉 々

く の せ い き よ う の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を い く と せ  
正 教 幾 歳

に も ま も り た ま え  
護 給

( 祈祷終了、十字架接吻 )

【 いくとせ  
幾歳も 】

い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く

と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も

い 幾 く と 歳 せ も

りょうせいかんしゃしゅくぶん  
【 領 聖 感 謝 祝 文 】

かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き  
神や光榮は爾に歸す、神や光榮は爾に歸す、神や光榮は爾に歸す、

【 第一祝文 】 しゅわ かみ なんぢわれざいにん す なおなんぢ せい きみつ あづか もの  
主我が神や、爾我罪人を棄てずして、尚爾の聖なる機密に與る者

いた たま なんぢ かんしゃ われた もの なんぢ しじょう てん たまもの う ゆる  
と致させ給うを爾に感謝す、我堪えざる者に爾が至淨なる天の賜を受くるを容し

たま なんぢ かんしゃ しゅさい ひと あい しゅ われら ため し ふくかつ われ たましい からだ  
給うを爾に感謝す、主宰・人を愛する主、我等の爲に死して復活し、我が靈と體

とに恩を與え、之を聖にするが爲に、我等に此の恐る可くして生命を施す機密を賜いし者

もと こ きみつ われ たましい からだ いや およそ てき がい か われ ころめ あきら  
や、求む此の機密は、我にも靈と體とを癒し、凡の敵の害を驅り、我が心の目を明

かにし、我が靈の力を平安にし、耻を得ざる信とし、偽なき愛とし、睿智を充たし、

なんぢ いましめ まも なんぢ しんせい おんちよう ま なんぢ くに つ もの え  
爾の誠を守らしめ、爾が神聖の恩寵を益し、爾の國を嗣がしむる者となるを得せ

しめ給え、我は此くの如く、是の機密にて爾の成聖に護られ、常に爾の恩寵を思い、

またおの ため せいかつ すなわちなんぢわ しゅさいおよ おんしゅ ため せいかつ もつ えいせい のぞみ  
復己が爲に生活せず、乃爾我が主宰及び恩主の爲に生活し、以て永生の望を

いだ こ よ はな えいえん いこい か しゅく もの た こえ およ なんぢ かんばせ い  
懐き、此の世を離れて、永遠の息、彼の祝する者の絶えざる聲、及び爾が顔の言い

つく びぜん み もの かぎ たのしみ ところ いた けだし わ かみ なんぢ  
盡されぬ美善を見る者の限りなき樂の處に至らん、蓋ハリストス我が神や、爾は

なんぢ あい もの まこと のぞみ い つく たのしみ およ ぞう う もの なんぢ よよ ほ  
爾を愛する者の眞の望と言ひ盡されぬ樂なり、凡そ造を受けし者は爾を世に讃

うた  
め歌う、「アミン」

【 第二祝文 聖大ヴァシリイの原文 】 しゅさい かみ ばんせい おう ばんぶつ ぞうせいしゃ  
主宰ハリストス神、萬世の王、萬物の造成者や、

およ われ たま ところ しょぜん かついのち ほどこ しじょう なんじ きみつ う たま なんじ  
凡そ我に賜いし所の諸善、且生命を施す至淨なる爾の機密を領けさせ給いしを爾

に感謝す、又爾に祈る、善にして人を愛する主や、我を爾が庇の下に、爾が翼

かげ まも われ いき た いた まで いさぎよ りょうしん もつ とうぜん なんぢ せいたい  
の蔭に護り、我に呼吸の絶えんとするに至る迄、潔き良心を以て、當然に爾の聖體

せいけつ う もつ つみ ゆるし えいせい う いた たま けだしなんぢ いのち かに せいせい  
聖血を領け、以て罪の赦と永生とを得るを致させ給え、蓋爾は生命の糧、成聖の

いづみ しょぜん たま しゅ われらなんぢ ちち せいしん こうえい けん いま いつ よよ  
泉、諸善を賜う主なり、我等爾と父と聖神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、「ア

ミン」

【 第三祝文 聖シメオン「メタフラスト」の原詩 】 わ ぞうせいしゅ あまん おのれ み かに  
我が造成主、甘じて己の身を糧とし

われ あた ひ ふとうしゃ や もの もと われ や なか すなわちわ ひやくたいしよせつしんぶく  
て我に與え、火にして不當者を焚く者や、求む我を焚く母れ、乃吾が百體諸節心腹

い わ しょざい とげ や たましい きよ おもい せい すじ ほね かた ごかん あきら  
 に入り、吾が諸罪の棘を焚き、靈を淨め、思を聖にし、筋と骨とを固め、五官を明か  
 にし、吾が全身を、爾を畏るる畏に釘うち、常に我を庇い、我を保ち、我を靈を害  
 する諸の行と言とより護り、我を淨め、我を滌い、我を飾り、我を治め、我を啓  
 き、我を照し、我が復罪の住所たらずして、獨爾が聖神の住所たるを顯し、凡の悪者  
 およそ よく われせいたい い よ なんぢ いえ もの に ひ に ごと  
 凡の慾は、我聖體の入るに依りて爾の家となりし者より逃ぐるごと、火より逃ぐるが如く  
 ならしめ給え、我其轉達者として、諸の聖者、諸品の神使、爾の前驅、智慧なる使徒、  
 およ なんぢ むてんしじょう はは なんぢ すす じれん しゅわ かれら きとう い  
 及び爾が無玷至淨の母を爾に進む、慈憐の主我がハリストスや、彼等の祈禱を容れて、  
 なんぢ えきしゃ ひかり こ たま けだしひとりしぜん しゅ なんぢ われら たましい せいせい こう  
 爾の役者を光の子となし給え、蓋獨至善の主や、爾は我等の靈の成聖と光  
 みょう われらみなかみ しゅさい よろ ところ ごと ひび こうえい なんぢ けん  
 明なり、我等皆神と主宰に宜しき所の如く、日に光榮を爾に獻ず、

【 第四祝文 】 しゅ われら かみ ねがは なんぢ せいたい わ ため えいせい  
 主イイススハリストス我等の神や、願くは爾の聖體は、我が爲に永生

なんぢ そんけつ つみ ゆるし ねがわ こ かんしゃ まつり わ ため きえつ そうけん  
 となり、爾の尊血は、罪の赦とならん、願くは此の感謝の祭は、我が爲に喜悅と壯健  
 あんらく またおそ べ なんぢ さいど こうりん とき われざいにん なんぢ こうえい みぎ た  
 と安樂とならん、又畏る可き爾が再度の降臨の時、我罪人に、爾が光榮の右に立つ  
 え たま なんぢ しじょう はは しょせいじん きとう よ  
 を得せしめ給え、爾が至淨の母と諸聖人との祈禱に依りてなり、

【 第五祝文 至聖生神女に捧ぐ 】 しせい ぢよさい しょうしんぢよ わ くら たましい ひかり  
 至聖なる女宰・生神女、我が味みたる靈の光、

わ たのみ おおい かくれが なぐさめ よろこび なんぢ われた もの なんぢ こ しじょう たいしそん  
 吾が憑恃と幷幪と避所と慰藉と歡喜や、爾が我堪えざる者に、爾の子の至淨の體至尊  
 ち う もの え たま なんぢ かんしゃ なおいの まこと ひかり う もの  
 の血を領くる者となるを得せしめ給いしを爾に感謝す、猶祈る、眞の光を生みし者や、  
 わ ころろ れいもく あきらか ふし いづみ う もの われつみ ころ もの い たま  
 吾が心の靈目を明にせよ、不死の泉を生みし者や、我罪に殺されたる者を生かし給え、  
 じれん かみ じあい はは われ あわれ わ ころろ しょうかん ひつう わ おもい けんそん わ とりこ  
 慈憐なる神の慈愛の母や、我を憐み、吾が心に傷感と悲痛、吾が思に謙遜、吾が虜  
 となりし意念に呼還を賜い、我に呼吸の絶えんとするに至るまで、罪を獲ずして、至淨なる  
 きみつ せいせい う たましい からだ いやし う いた ならび われ つうかい うけとめ なみだ  
 機密の成聖を受けて、靈と體との醫を得るを致し、並に我に痛悔と承認との涙  
 あた しょうがいなんぢ かしょうさんえい たま けだしなんぢ よよ さんび こうえい み こうむ  
 を與えて、生涯爾を歌頌讚榮せしめ給え、蓋爾は世に讚美と光榮とを満ち被  
 る、「アミン」

2026年4月6日 一部改訂